



「環境気候学」

吉野正敏・福岡義隆 編
 東京大学出版会，2003年9月
 392頁，4600円（本体価格），
 ISBN4-13-062710-4

本書「環境気候学」の主題・中身をキーワードで表現すれば、その1つには「モンスーンアジア」が入るであろう。気象学の重要な研究課題の1つである「アジアモンスーン」という言葉の逆である。本書はアジアモンスーンという自然的条件が、36億の人間の生活環境とどのように関わりあっているのかを記述する。すなわち、昔の言葉でいう「風土学」、あるいは「風土論」を、現代風に「環境気候学」として、非常に広範な内容を全392ページに取りまとめたものである。まえがきにも述べられているように、本書の前身は1979年、同じ東京大学出版会から刊行された福井英一郎・吉野正敏編著の「気候環境学概論」で、それを基礎にしつつ新しい構想によって“気候学”のうちの環境に関する部分を取り上げて詳しく論じたものである。全体で9章が、大きく3つの部分に分けられている。

I 環境と気候のとらえかた

- 第1章 環境論の歴史（吉野正敏，福岡義隆）
- 第2章 気候変動と古環境（安田喜憲）
- 第3章 環境問題の展開（原沢英夫，山川修治，大和田道雄，吉野正敏）

前書以来25年が経過し、この間の地球規模での環境問題の深刻化とも絡んで、ここでは、最近の環境問題が環境学や風土論と関連させて述べられ、古環境の実態や、現代の環境問題が紹介される。

II 人間環境と気候

- 第4章 衣食住と気候（田村照子，畑江敬子，堀越哲美）
- 第5章 人間生活と気候（稲葉 裕，吉野正敏）
- 第6章 都市の気候（山下脩二，三上岳彦，一ノ瀬俊明）

III 気候利用のさまざま

- 第7章 産業と気候（福岡義隆，山川修治，吉野正敏，加賀美雅弘）
- 第8章 局地スケールの気候環境（大和田道雄，中川清隆，福岡義隆）
- 第9章 動植物の生活と気候（樋口広芳，大澤雅彦，増田啓子）

ここでは、気候資源や局地気候の利用実態、さらに民俗・習慣、生物などと気候の関連が論じられる。

これだけ広範な分野を論述するのであるから、執筆者は18人の多きに渡っている。評者の学問的容量では各章について一様な論評が出来かねる。いわゆる風土記的部分については、なるほど、そういうこともあるのかと、興味が尽きない一方で、評者の研究分野に近い部分については、記述の粗さに気づくのはやむを得ない。評者が特に啓発されたのは、第2章気候変動と古環境である。著者らが近年進めてきた湖底の堆積物の年縞の分析によって初めて解明された、いわば、湯気の出ている研究成果をまとめたものであり、多くの文献が2000年以降のもので、読者も啓発される部分が多いと思われる。文献リストも豊富である。例えば、著者は乾燥域と大河の境界に発達した4大古代文明のほかに、モンスーンアジアの大河（長江，ガンジス川，メコン川）のほりに古代文明が発達し、その後の気候の寒冷化によって崩壊したのではないかと推論する。また、時を同じくして崩壊した青森県の三内丸山遺跡をはじめ、縄文中期の文化の突然の崩壊の気候学的理由を空想するなど読者の特権的楽しみではなからうか？ ただ、著者は約15,000年前のペーリング垂間氷期の「地球温暖化」と21世紀の「地球温暖化」を重ねているが、そのこと自体が大きな研究課題あるいは問題提起で、次章第1節「地球温暖化の影響問題」の「地球温暖化（CO₂を始めとする温暖化ガスの大気中濃度増加による下層大気の上昇）」とは少し意味・内容が異なることについて、注釈が必要だったのではないかと評者は感じた。初学者が混乱しないことが望まれる。

いわゆる、地理学の1分科としての気候学の教科書として、出色の出来栄えと思え、評者など大いに勉強になり楽しませてもらったが、「気候力学」、すなわち、気候変動のメカニズムを物理的に解明しようとする分野に興味を持つ若い人（本誌の読者の多く（?））には物足りないと感じる部分もあるかも知れない。しかし、もともと、吉野氏らの目的は気候変動のメカニズムの物理的解明にあるのではない。むしろ、気象力学・気候力学が有効に活用されそうな、あるいはそれらを駆使して解明されるべき、かくも広範な応用気候学分野が眼前に横たわっており、それらを吉野氏ら気候学の権威・先達がどのように料理し纏めて提供してくれていると理解すべきであろう。気象学が関係する、あるいはその応用を待っている、かくも広範な分野があるのだというのが、評者の一番の感想である。巻末に編者の1人、吉野正敏氏作成による「世界と日本の環境気候学史年表」が付加されていて、参考になる。

（気象研究所 佐藤康雄）